

ありがとうの言葉

看護師になると決意を固めて看護学校へ入学し、疾患や患者さんとの関わり方などたくさんのことを学びました。私は人と話すことが好きで、患者さんとコミュニケーションを図ることは実習の中の楽しみの1つでした。私は2年生の実習で、初めて終末期の患者さんを受け持ちました。80代の女性でがんが全身転移し、寝たきりで痛みと苦痛を常に訴えていました。「痛い」と顔をしかめる患者さんに対して、私は初めてコミュニケーションに戸惑いました。また、あまりにも辛そうな患者さんに対して、何ができるのか悩みました。どんな看護をしたらいいのかわからないまま、手の浮腫が著明であったため、ベッド上で手浴を実施しました。その時、「あったかい、気持ちいい」と目を閉じたままそっと患者さんが言いました。その言葉で私は、患者さんが少しでも安楽になるようなケアをしようと思いました。また、患者さんは微熱がありました。看護師さんが氷枕を当てたとき、「気持ちいい、体の痛みがスーッととれる気がする」と言いました。痛みの緩和を感じる患者さんの様子を見て、明日からも冷罨法を患者さんの状態を見ながら実施したら、また痛みを少しでも緩和できるかもしれないと思い、私の中で患者さんを安楽にし、疼痛緩和をするという看護の目標が明確になりました。しかし、その日の患者さんの様子はいつもと違いました。患者さんの部屋から退室する際、「行かないで」と患者さんは私に言いました。痛みと苦痛があり、患者さんは寂しさや不安が強いことを感じ、出来るだけ患者さんの部屋へ入室し、寄り添うようにしました。その日の実習時間が終了となり帰ることを患者さんへ伝えました。患者さんは私の手を今までにない強さでぎゅっと握りました。「帰っちゃうのか、さみしいね。勉強頑張っただね。ありがとう。さよなら。」と言いました。話すのも苦しそうな中で、最後に笑顔を私に向けました。私は、「さよなら」が胸の中で少し不安になりながらも、患者さんからもらった言葉と初めて見ることができた笑顔をただただ嬉しく思いました。明日からもっと頑張ろう、明日も冷罨法してみよう、状態に合わせたケアもやっていこうと思い、次の日に患者さんに会うことが楽しみでした。次の日、病棟へ行くと患者さんは亡くなっていました。私は顔を見ることだけできました。今までにないショックを受け、涙が止まりませんでした。患者さんの言葉や笑顔が浮かび、後悔もあふれました。もっとそばにいたかった、もっと私にできることはあった、明日からではだめだと強く思いました。明日は必ず来るものではないので必要な時に、看護は提供しなくてはいけないと感じました。患者さんから大切なことを教えてもらいました。患者さんとの出会いはかけがえのない時間になりました。患者さんの顔を見たとき、私自身の感謝の気持ちを最後に伝えられなかったことは今でも心残りです。